



Title	ベータ・アレマンの文学研究
Author(s)	山田, 貞三
Citation	独語独文学科研究年報, 20, 167-180
Issue Date	1993-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25958
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_P167-180.pdf



ベーダ・アレマンの文学研究*

山 田 貞 三

戦後の(旧西)ドイツのゲルマニスティークを顧みると、制度的には大学の研究・教育機関の中に確固たる地位を占めているこのマンモス学科も、しばしば自らのレゾン・デートルをめぐる議論を余儀なくされ、危機的な状況を訴えながら学問としての正当性を批判的に検証してきた経緯を示している。その存立基盤は必ずしも安定しているようには見えない。1966年にミュンヘンで開催されたゲルマニストの大会は、周知のように「ゲルマニスティークと文学におけるナショナリズム」というテーマで自己の民族的、国家的イデオロギーの問題性を論じている¹⁾。その背景には、ドイツの民族的な伝統の中で当初からナショナリズムとの危うい関係を内包しながら発展してきたゲルマニスティークが、結果的にはナチズムに迎合した形で破局を迎えながら、その忌まわしい過去の歴史を清算することなく、依然として言わば象牙の塔の中でドイツ文学の研究に専念して絶望的なまでのアナクロニズムに陥ってしまったという状況認識があった。そして、文学研究はもはや現実から遊離した単なる理念的な領域に引き籠ることは許されず、積極的に価値判断を加えながら現実の社会との関係を模索しなければならないという問題意識が六十年代の後半以降、急速に高まっていく。「危機」の分析と「批判」を踏まえて将来への展望を探った論文集『未来のゲルマニスティークへの提言』(1973)では、文学研究の社会的な機能が殆ど絶対的なまでの価値基準となり、その政治化、社会参加、あるいは「実践的で党派的な学問」までが提唱された²⁾。こうした議論は現在に至ってもその基調は殆ど変わっていないように見える。最近出版された上記論文集の増補版とも言える本『なお何のためのゲルマニスティークか』(1989)の中で、編者は、急激な経済的、技術的な発展に伴って社会文化的な構造が大きく変化した現代においてこそ六十年代に提起された諸問題はいつそう焦眉の課題として捉えられなければならないと述べている³⁾。

ゲルマニスティークの社会的な有意性をめぐる議論は、当然ながら文学研究の方法論にも影響を及ぼしてきた。従来専ら伝記的な事実関係にのみ立脚した「実証主義」、逆にそこから結果的には形而上学的な意味論へと超越した「精神史」、あるいは作品の内在的解釈に逃避したと見なされた「様式批評」は斥けられ、方法の多元化と精緻化が要請される。特定の古典的な作家とその作品に依拠した規範的な文学概念は相対化され、受容美学や文芸社会学の理論に示されているように、考察対象が創作レベルから受容とそのメカニズムへと拡大されるとともに、社会学、心理学、構造言語学、あるいはコミュニケーション理論等、他領域

のより厳密な方法論が援用されて文学研究の言わば科学化が図られた。とりわけ七十年代に入ってからは方法論をめぐる論争が活発に行われ、ゲルマニスティークは、文学研究というよりも突如として個々の方法の有功性を競う方法論研究の場と化したかのような様相を呈してくる⁴⁾。

こうした自己批判の契機自体は確かにゲルマニスティークにおける学問的営為の健全性を示しているのではあるが、しかし他方、自らの存立基盤に関わるような議論を繰り返し行わざるをえない事態は、やはりこの学科が抱えている根本的な問題を露呈しているとも言える。文学の研究がひとつの学問的な理論体系として確立されるためには何よりもまずその研究対象の厳密な規定が問われなければならない。それはあらゆる学問研究の前提条件である。しかし、一見、自明とも言えるこの問いは、文学研究の場合、〈文学とは何か〉という本質規定の問題とも必然的に絡んだ極めて困難な問題性を伴っており、文学研究の社会的な意義と方法論をめぐる議論に終始したこの検証作業の過程では殆ど顧みられなかったのではないか。本来、第一に問われるべき研究の基本的な前提をなおざりにしてきたが故にゲルマニスティークはその時々 Ideology に左右され、唐突とも言える方法の多元化を招来したとも言えよう。ヘルムート・アルンツェンはこのような現象を「学問のオポチュニズム」と見なして次のように述べている。「『作品内在的解釈』から政治化、つまりゲルマニスティークの再 Ideology 化、そして七十年代の初・中期からの科学化、しかしそれもすでに終息しつつあるように見える。この変化に際してはよく政治的、歴史的な対応関係が指摘されてきた。部分的には確かにその通りである。しかし変化の原因は政治的な状況にも Ideology 的な欲求にも求めることはできないであろう。一つのパラダイムの完全な消失、急激なパラダイムの交替は、その極めて皮相かつ暫定的な応用を示唆しているように思える」⁵⁾。文学研究が自分の言葉を失い、他の学問領域の用語によって自己を規定する、それはアルンツェンの言うように「文学と文芸学の疎外過程」⁶⁾に他ならない。勿論、文学研究の社会的な意義を問い、方法の厳格な適用を図ること自体に異議を唱える者はいないであろう。しかしゲルマニスティークのより深刻な危機は、これらの問題があまりにも性急に、言わば文学なき文学研究の次元で論じられてきた経緯にあったのではないか⁷⁾。

ベード・アレマンはこのような事態に対して早くから警鐘を鳴らしてきた。66年のミュンヘン大会では彼自身、クライストとナショナリズムとの関係について報告しているが、彼の関心はあくまでも作品の〈構造的な分析〉に向けられている。作家の志操や作品の中で語られる個々の言葉に社会的あるいは Ideology 上の意味合いを探ることは、アレマンにとってこの問題の矮小化を意味していた。「文学 (Dichtung) が置かれている社会や時代の連関を真剣に考えればこそ、この連関は単に作品の皮相な内容、特定の見解や意図だけにではなく、最終的には詩的作品 (das dichterische Werk) それ自体に関連づけられなければならないだ

ろう」⁸⁾。彼はこうした考え方を単なる美学的な問題設定と誤解しないよう断わっているが、「Dichtung」あるいは「dichterisch」という、まだ国家イデオロギーのコノテーションが纏い付いている概念で語るアレマンの言葉は、当時の大会会場に一つの不協和音として響いたのではないだろうか。

アレマンは上記の論文集（『未来のゲルマニスティークへの提言』）にも「文芸学における構造主義？」と題した一文を寄稿している⁹⁾。この疑問符が附された表題からは基本的に二つの意味が読み取れよう。一つは、言語学、特に音韻論の分野で実証された構造主義の厳密な分析手法をそのまま文学研究に転用しようとする試みへの懸念、もう一つは文学の構造分析を積極的に推進する立場からの問題提起。アレマンはこの論文の中でレヴィ＝ストロースの民族学研究を高く評価しているが、それは彼が音韻論の分析モデルに準拠しながらも神話の思考構造を明らかにすることによって民族学に新たな局面を切り開いたからである。「文芸学における構造主義」が文学の理論として確立されるためには、単なる言語学的モデルの転用ではなく、自らの研究対象に即した文芸学独自の構造分析が行われなければならない。その研究対象は「言語」ではなく、あくまでも文学それ自体、「文学性」と言う。無論この概念は言語規範からの偏差としてテキストの文学性を定義する構造言語学とは異質な次元で捉えられている。文芸学が目指すべき構造主義的な文学理論の課題をアレマンは次のように定式化した。

文芸学は構造分析の独自の形式を発展させる。

テーゼ：文芸学の対象は（言語でも文学テキストの総体でもなく）テキストの文学性である¹⁰⁾。

これは文学研究に対する彼自身の基本的な考え方であり、彼が自らに課した課題でもあった。しかし、テキストの文学性を構造的に分析するとは何を意味しているのか。アレマンはこの課題にどう取り組んだのであろうか。以下、ベード・アレマンの文学研究をこうした観点から辿ってみたい。彼の残した仕事は今なお折衷的な方法論やイズムに揺れるゲルマニスティークに文学研究の根本的な問題を突きつけているように思えるからである。

すでに五十年代の半ば、アレマンは当時の文学研究が置かれている状況に対してある「憂慮」の念を表明している¹¹⁾。それは、既存の文芸学が一方で「感情移入」を元徳とした文学作品との自己同一化へ、他方ではそれを単なる歴史的な対象物と見なす客観主義へと分極化し、いまだ研究対象との適切な「距離」を見いだすことができずに、学問としての十分な自己省察をも欠いているという認識であった。「自己同一化として理解された感情移入は、真に生起的な歴史の緊張を看過し、対象の歴史的な研究はこの緊張を平準化してそれを単なる歴史的

な諸関係へと硬化させてしまっている¹²⁾。アレマン自身はシュタイガーの提唱した「様式批評」の立場に立っているのであるが、彼の関心はこの批判からも窺えるように、文学と文学研究の「歴史性」(Geschichtlichkeit)に向けられている。勿論それは作家の伝記的な事実関係や作品の成立した時代背景を実証的に研究するという意味での歴史性(Historizität)を指しているわけではない。様式批評ではすでにそのような観点を前提に理論構築が図られているのであるから。彼は、「歴史性」を文学の根本的な存在様式として位置づけ、文学研究を「真の歴史学」へ発展させようと考えているのである¹³⁾。

このような憂慮と問題意識からアレマンは、「詩的なるものについて」と題する講演で、一見、あまりにもナイーブな、しかし極めて大胆な問題提起を行った。

詩的なるものの現成——律動

(Das Wesen des Dichterischen —— der Rhythmus)¹⁴⁾

これを詩あるいは文学の本質とは律動である、という実体論的な規定と見なしてはならない。彼自身、これは「定義」ではなく、ひとつの「問い」にすぎないと注釈を加えており、その際、„das Wesen“という語を動詞として理解するよう求めている。明らかにハイデガーの存在論的(ontologisch)な思索に依拠した言葉であるが、この「律動」概念は、あの「われわれを感動させるものをわれわれは理解する」という有名なシュタイガーのテーゼに即して捉えられている。「律動とは、まず詩がわたしたちの心を——情動的にと言ってかまわないと思うが——打つものの総体である。わたしたちがその詩的構造の細部を把握する以前、詩の内容をはっきりと理解する前にも、詩の律動的な形態は明確に絶対的な形で目の前に存在している¹⁵⁾。このような事態をシュタイガーも「律動」という言葉で捉えているが¹⁶⁾、アレマンはそれをあくまでも〈歴史的に〉(geschichtlich)理解しようとする。勿論ここで言われている「律動」は狭義の韻律的なリズムを意味してはいない。律動は、「詩的なるもの」の創り出すひとつの〈緊張構造〉として理解されなければならないのである。詩的なるものとは、クロノメーターによっては計りえない、根源的な「時間性」(Temporarität)の層位に現成する「出来事」(Ereignis)であり、時間の脱自態(Ekstasen)である「未来」(Zukunft)と「既往」(Herkunft)の緊張関係の中に定位される。わたしたちがこの詩的なるものと感応し合うのは、本来わたしたち自身が「現存在」(Dasein)として同じ時間性の中に共存しているからである。律動の歴史性はこのような時間の緊張関係において初めて認識されるのであって、時計時間の線条的な経過、その過程に記される雑多な歴史資料からは捉えられないと言う。

律動とは詩的なるものの生み出す緊張構造である、と言っても空を掴むような話であるが、アレマンはこれを詩の「現実」(Wirklichkeit)と呼んでいる。「詩的なるものの現成としての

律動は、詩の本来の現実でもある。現実と言えわたしたちは普通だれにでも具体的に見えるもの、外部世界を想う。しかし、詩の現実としての律動は、これまで見てきたように、不可視なもの、ある意味では言葉に絶するものの領域に属している¹⁷⁾。詩の描出する世界はそれゆえ単なる外部世界の模倣ではありえない。現実と仮象といった二元的な対立関係、あるいは虚構性といった概念によっても特徴づけられない性格をもつことになる。律動はその歴史性において初めて認識されうるのであり、歴史的に理解されなければならないからである。しかし、どのようにして？それはどんな意味をもつのであろうか？

三十歳になったばかりの新進気鋭の学者として、アレマンは真っ向から「詩的なるもの」に挑みかかるという不遜な企てを行ったのであるが、この試みが十分な説得力をもって論証されているとは言い難い。そもそも言葉に絶するようなものを直接に論じようとする自体に方法論上の問題があろう。ハイデガー哲学の用語を鏤めたテキストは¹⁸⁾、まだその影響力に対して適切な「距離」を取りえていない生硬さも示している。ちなみに「律動」という概念はその後ほとんど用いられていない。もっとも、彼自身が述べているように、これはひとつの問題提起なのであり、その問いの所在は明らかであろう。一般化した言い方をするなら、文芸学はあくまでも文学の文学性（詩的なるもの）を研究対象とし、しかもそれをハイデガーが開示した存在論的な歴史の層位に捉えるべきではないか、ということである。彼は以後、一貫してこの問いを問い続けることになる。それは換言するなら、学問としての文学研究があつた「不可視なもの」あるいは「ある意味では言葉に絶するもの」をいかに自分自身の言葉で概念化しえるのか、という問題でもある。ここで実証的な検証可能性という意味での学問性が問題にならないことはすでに明らかであろう。

文学研究の学問性に対するアレマンの考え方は、やはりハイデガーから決定的なインパクトを与えられている。それは彼がハイデガーの立てた諸定理を単に文学研究へ応用するという次元の話では勿論ない。ハイデガーの思索は、文学研究に固有の学問性とは何か、という文芸学の根幹に関わる問題への挑発として受けとめられており、アレマンはそれとの対決を通して「真の歴史学」としての文学理論を模索したのである。彼の遺した著作には直接に文学理論やその学問性をテーマに論じたものはないが、しかしどのような論文にも必ずといってよいほどこの点への言及がある。とりわけ『ヘルダーリンとハイデガー』（1954）——その第二版（1956）には「ハイデガーと文芸学」と題した一章が新たにつけ加えられている¹⁹⁾——及びハイデガー生誕百年の記念論集に寄せられた論文「思索、詩作；文学理論の見地から」（1989）²⁰⁾に、わたしたちは彼の基本的な立場を窺うことができる。

ハイデガーのヘルダーリン解釈が文献学の厳密なテキストクリティークに反して行われたことは周知の事実であるが、アレマンはそれを単に方法論上の不備、非学問的な行為としてのみ批判するのではなく、文芸学それ自体に向けられたひとつの重大な問題提起として捉え

た。「学問的な証明の射程はあまりにも小さい」というハイデガーの言葉を引用して彼は次のように解説している。「その理由は、学問的証明が陳述-命題の正しさ(Richtigkeit)までしか明らかにできないという事情にある。しかしこの思索にとって問題なのは存在の真理なのである」²¹⁾。この言葉はそのままアレマン自身の文学研究にあてはめることができる。彼は文芸学を(「科学」ではなく)「批評」(Criticism)と見なしているのであるが、「文学批評には単なる学問的な正しさよりも実際、より高次の真理が含まれている」と考えているからである²²⁾。もし文芸学の学問性を「判断の正しさ」にのみ求めるなら、それは結局のところ、いかに作品をその作家が理解した以上に正しく理解することができるかという問題に帰着してしまうだろうと言う²³⁾。しかしアレマンにとって文学研究の仕事は、作家あるいはその作品「内容」の理解に尽きるものではない。解説・解釈を加えながら「内容」を再構成し、それを概念的にパラフレーズして学術論文に仕立て上げるという、多くの二次文献に見られる手法は、彼に言わせれば似非文芸学に他ならない。文学研究が呈示すべき「より高次の真理」は、作品の中に、紙の上に文字として記されているわけではないからである。「すべての真に詩的な言葉は、言明と沈黙との相互作用の中から生じてくる。言明された事柄にしがみつくと学問性が本質的に詩的な領域に到達しえない本来の理由はここにある」²⁴⁾。学問的な正しさを越えた真理などと言えば神秘主義の誇りを招きかねないが、アレマンにとっての問題は、陳述命題の正しさや言明された事柄の実証的な研究によっては捕捉できない「本質的に詩的な領域」——あの言葉に絶するという「詩の現実」の解明にふさわしい学問性の獲得にある。当然ながらそのためには在来の文芸学において一定の役割を果たしてきた、いわゆる概念装置の見直しが迫られることになる。「一学問の水準は、その基礎概念がどの程度にまで危機を受けとめえるかということから規定される」。これはアレマンが『存在と時間』の中から引用した一文である²⁵⁾。ハイデガーがこのテーゼに基づいて既存の哲学体系を問い直そうとしたように、彼もまた同様の試みを文学の領域において行ったと言えよう。

「専門家集団の文芸学は、形式と内容の一致が文学史を構成する重要作品の本質的な品質特性であると強調することにより、随分とながきに渡って功績を挙げ続けてきた。主題的な所見を越えて構造的な緊張の解明にまで迫ろうとする分析は、それとは逆に形式と内容の矛盾を指摘しなければならない。この矛盾がすぐれた文学的、詩的な作品を際立たせているのである」²⁶⁾。アレマンのこの皮肉の籠った言葉には、既存の文芸学に対する批判とともに、具体的な作品分析における彼の方法論上の原理が端的に示されている。彼は「形式」と「内容」を異なるカテゴリーに属する概念とは見なさない。これらはいずれも「主題設定」(Thematik)の次元に関わる問題として捉えられている。そして「主題」(Thema)とは「あらかじめ措定されたもの」(das Voraus-Gesetze)、「題材」(Vorwurf)と解されており²⁷⁾、その意味ではコンベンショナルなもの、実証的に分析可能な対象である。アレマンの意図する文学研究は、

このような主題的な次元、例えば詩や戯曲あるいは小説の意味内容とそれぞれのジャンル形式の分析にとどまらず、主題的次元の内部に潜在する矛盾、そしてその矛盾が生み出すテキストの「構造的な緊張」を解明しようとする。両者の関係は「主題的—構造的な差異」(thematisch-strukturelle Differenz)とも呼ばれているが、ここで用いられている「構造」概念は、「極限值」(Grenzwert)として理解されており、建築構造の意味あい、あるいはまた上で触れた構造言語学の術語とは異質な性格をもっている²⁸⁾。極限值とは数学的な意味で変数 x が一定の値に限りなく近づいていく値を指す。これをアレマンの理論に重ね合わせて敷衍すると、「主題」が変数として限りなく近づいていく値、極限值、即ちそれがテキストの「構造」であり、一定の値としては、例えば彼がしばしば引用する次のようなカフカの言葉に語られた「真理」が考えられるであろう。「真理を前にひとこと退くことができる」とよいのだが。誰もが(この箴言でも)それを数百の言葉で踏み躪ってしまう²⁹⁾。無論そのような「真理」を掴むことが問題なのではない。文学の文学性あるいは「詩性」(Poetizität)というのは、テキストの主題設定とこの「構造」との緊張関係、「差異」において開示されると考えられているのである³⁰⁾。詩的言語は言明と沈黙の相互作用から生じる、とアレマンは述べたが、基本的にはこの相互作用がテキストの構造化を規定すると言える。

主題設定と構造の差異は、やはりひとつの生起的な「出来事」(Vorgang)として認識されなければならないのであるが³¹⁾、しかし、実際の読書過程においてこの差異化がどのように起こり、どのような意味をもつのか、上で述べたあの律動の歴史的な理解に際して投げかけた問いが再び生じてくる。「律動」も「主題的—構造的な差異」も、ともに「詩的なもの」、文学の文学性を指示しており、両者の間に本質的な違いはない。この疑問に対しては修辞学から転用された彼の「状況変位」(Situationsverschiebung)という概念が具体的な示唆を与えてくれよう。文学と現実との関係を論じる場合、アレマンは「変容」(Verwandlung)という言葉をよく用いた。そのもっとも中心となる考えは「現実のモデルへの変容」に示されている³²⁾。「モデル」とは個々の文学作品を指しているのであるが、この概念には、複雑な現実の事象を単純化してその再構成・再認識を図るという通常に用いられる意味は含まれていない。「限定された意味におけるモデルは常にひとつの構造モデルである。即ち、それは、所与の現実のひとつひとつ順を追って、言わば文字通りに関連づけられるのではない。構造モデルはある種の機能的な連関を内包しており、それによってそもそも現実というものが理解され、把握されるようになるのである」³³⁾。現実があってモデルがあるのではなく、モデルによって初めて現実が現実として認識可能になる、その意味ではモデルが「本源的なもの」³⁴⁾なのである。現実をモデルへ変容するということは、現実を現実として意識化する過程、ハイデガーの言葉を借りるならば存在論的な意味において世界そのものを開示する過程に他ならない。アレマンはこの変容過程に文学の詩的機能、即ち世界認識の機能を見ているのであるが、「状況変

位」はそのような事態を包括する概念として位置づけることができる。少し長くなるがアレマン自身に語ってもらおう。ここには文学研究に対する彼の基本的な考え方が顕著に示されている。

ポエトロギーとの関連から言うと、テキストによって引き起こされる状況変位は、世界の経験と開示という根源的な出来事を構成している。その時どきに規定されて得られた、世界の経験と開示として認識された状態は、常に結果であって、出発点ではない。作品を読み終わった後で、喚起された事柄や事態に対するわたしたちの視界は、それ以前のものとは異なっている。たとえそのことを読者が、作品に魅了された読者でさえもがはっきり気付かなくとも、否、気付かないからこそ異なっていると言えるのである。周知のように、同じテキストを繰り返し読んでいると、このような基本的視点の変位は徐々に深められさえする。この所見からすると、いわば背後から、テキストを作家自身が理解した以上により良く理解しようとすることも十分な意味をもってくる。もしそれが成功したなら、わたしたちは本当にテキストを歴史的に理解したことになるのだろうか。いずれにしろ、テキストが出来事として引き起こす認識過程を、ただ単に熟知した、とっくに前提とされている史実的なコンテキストへ組み込むばかりではなく、テキストの変位機能において把握し、自らに受け入れたことになるであろう³⁵⁾。

文学テキストを読む過程で生じるこの「基本的視点の変位」は、おそらく誰もが体験する一般的な事態を指しているにすぎないが、アレマンはそこに「世界の経験と開示」という認識論的な契機を捉えようとする。手短かに言えば、読者は基本的視点の変位過程において人間の世界内在的な存在構造をひとつの「出来事」として認識するのである。それは読者自身の「世界」に対する関係、自らの世界定位を意識化する過程とも言える。「状況を認識せよ」、ゴットフリート・ベンがこの言葉をアレマンはこのような意味で引用する³⁶⁾。「状況変位」は、テキストによって引き起こされるこうした認識論的な過程を指すのであるが、勿論それはテキストの中から作家の人生観や世界観あるいは時代精神なるものを知識として学び取れということではない。「世界の経験と開示」は、テキストの主題的な次元の背後に、ひとつの「出来事」として構造化されているのである。それをテキストの「変位機能」によって読者がそれぞれの立場において自ら把握すること——アレマンは慎重な言い回しで語っているが、それが即ち文学を歴史的に理解すること、少なくともその必須条件と見なされているのである。このように見ると、「状況変位」という概念も彼がさまざまに言葉を選びながら文学の文学たる所以を概念化した「詩的なもの」、「律動」、あるいは「主題的-構造的差異」と本質的には同じ意味内容をもっていることがわかるであろう。

文芸学はテキストの文学性を研究対象とし、構造分析の独自の形式を発展させる——文芸学の目指すべきこの課題にアレマンは驚くべき一貫性をもって取り組んできた。彼の意図する構造分析は自ら認めるように実証可能な領域を明らかに逸脱している。それは学問としての文学研究にとっては確かにある種の危険性を伴っているとも言えよう。しかし、例えば彼が編集を手掛けたパウル・ツェランの詩の意味が、実証的な文献学的手法によって解明できるとはもはや誰も考えないであろう。良く知られているように、ツェランは詩を「投瓶通信」(Flaschenpost)に譬えた。宛名不詳の通信文。精確に言うと、その言葉はいまだ存在しない受信者を探し求める過程、「語りかけることのできる現実」を目指して、「途上」にある³⁷⁾。この「現実」は、個々の単語の意味素性分析から得られるような意味 (Bedeutung) ではありませんし、また、受信者が存在しない以上、発信者と受信者を前提とした情報伝達理論の枠組みの中で理解されることも不可能である。ツェランの詩を「解読」(decodieren)しようとする者は、結局そこに記された言葉の「単なるパラフレーズ」に終わってしまうだろうとアレマンは警告する³⁸⁾。ツェランのように何処にも存在しない「現実」、まだ言葉に捕えられていないもの、言葉に絶するものを詩の中に探し求める、このような行為をそもそも可能にする詩の言葉に、彼は人間のもっとも根源的な認識能力を看取するのである。「学問的な証明の射程はあまりにも小さい」というハイデガーの言葉をアレマンは文芸学に対する挑発として真剣に受けとめた。そして自らの文学研究の射程をこうした認識論的次元に拡大してテキストの文学性を問いつけたのである——「文献学の伝統によって保証された文芸学本来の領域の縁を、一步、踏み出る危険を覚悟して」³⁹⁾。

ツェランを初め、アレマンが論じた作家達は実に多彩である。ゲーテ、フリードリヒ・シュレーゲル、ノヴァーリス、ヘルダーリン、クライスト、ケラー、ニーチェ、ホーフマンスタール、リルケ、トーマス・マン、ムシル、カフカ、ベン、ネリ・ザックス、プレヒト、カネッティ、フリッシュ、デュレンマット等⁴⁰⁾。ゲーテからツェランに至るまで、この間におよそ二世紀に及ぶタイム・ラグがある。アレマンの論文を読む者はしかし、そこに通常の文学史記述に見られるような史実的連関を読み取ることは出来ないであろう。彼の問う文学の歴史は、個々の文学テキストの中に生起する「世界の経験と開示という根源的な出来事」によって構成されるのであり、通時的なクロノロジー、あるいは何らかの歴史哲学的な意味の展開によって成立するものではないからである。それは、言わばカフカのあの「皇帝の使者」が走り抜けなければならない「数千年の時間的な深み」(die temporale Tiefe der Jahrtausende)⁴¹⁾を湛えていると言えよう。その歴史の行程をアレマンはこれらの作家達とともに一本の軸道として歩いたのである。彼の歩みは、この軸道に分け入ろうとしない既存の文芸学、「危機」論争に揺れてきたゲルマニスティックに対するひとつの挑発ではないだろうか。文学の研究に携わるすべての人々にとっても。

*本稿は、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団の奨学研究員として筆者がボン大学で行った研究活動(1991-1992)に基づいている。ペーダ・アレマン教授は1991年の盛夏に逝去。1926年生まれ。

注

- 1) Vgl. Nationalismus in Germanistik und Dichtung. Dokumentation des Germanistentages in München vom 17. -22. Oktober 1966. Hrsg. v. Benno von Wiese/Rudolf Henß. Berlin 1967, vor allem die Begrüßungsrede Benno von Wieses, S. 9 ff.
- 2) Hans-Wolf Jäger: Gesellschaftskritische Aspekte der Germanistik. In: Ansichten einer künftigen Germanistik. Hrsg. v. Jürgen Kolbe. München 1973, S. 61. Vgl. auch die Vorbemerkung des Herausgebers, S. 5f.
- 3) Wozu noch Germanistik? Hrsg. v. Jürgen Förster/Eva Neuland/ Gerhard Rupp. Stuttgart 1989, S. 1.
- 4) Vgl. Methoden der deutschen Literaturwissenschaft. Hrsg. v. Viktor Žmegač. Frankfurt a. M. 1972; Zur Kritik literaturwissenschaftlicher Methodologie. Hrsg. v. Viktor Žmegač/Zdenko Škreb. Frankfurt a. M. 1973; Literaturwissenschaft heute. Hrsg. v. Friedrich Nemeč/Wilhelm Solms. München 1979.
- 5) Helmut Arntzen: Die Sprache der Literaturwissenschaft als Anpassungsversuch. In: Wozu Literaturwissenschaft. Hrsg. v. Frank Griesheimer/Alois Prinz. Tübingen 1992, S. 66.
- 6) Ebd., S. 72.
- 7) Vgl. Roger Willemsen: Tragödien der Forschung. Über eine Literaturwissenschaft ohne Literatur. In: Wozu noch Literaturwissenschaft. Hrsg. v. Frank Griesheimer/Alois Prinz. Tübingen 1992, S. 47ff.
- 8) Beda Allemann: Der Nationalismus Heinrich von Kleists. In: Nationalismus in Germanistik und Dichtung. Dokumentation des Germanistentages in München vom 17. -22. Oktober 1966. Hrsg. v. Benno von Wiese/Rudolf Henß. Berlin 1967, S. 309f.
- 9) Beda Allemann: Strukturalismus in der Literaturwissenschaft? In: Ansichten einer künftigen Germanistik. Hrsg. v. Jürgen Kolbe. München 1973, S. 139-148.
- 10) Ebd., S. 145.

- 11) Beda Allemann : Über das Dichterische. Pfullingen 1957, S. 72.
- 12) Ebd., S. 81.
- 13) Ebd., S. 74.
- 14) Ebd., S. 13.
- 15) Ebd., S. 12.
- 16) Emil Staiger : Die Kunst der Interpretation. Zürich 1955, S. 13.
- 17) Allemann : Über das Dichterische, S. 45.
- 18) 本文に挿入したドイツ語(Temporarität, Ereignis, Ekstasen, Zukunft, Herkunft, Dasein, Wesen, geschichtlich, Geschichtlichkeit)は、すべてハイデガーが用いた概念である。
- 19) Beda Allemann : Hölderlin und Heidegger. Zürich/Freiburg i. B. 1956.
- 20) Beda Allemann : Denken, Dichten : Literaturtheoretisch. In : Kunst und Technik. Gedächtnisschrift zum 100. Geburtstag von Martin Heidegger. Hrsg. v. Walter Biemel/Friedrich Wilhelm von Herrmann. Frankfurt a. M. 1989, S. 377-402.
- 21) Allemann : Hölderlin und Heidegger, S. 188.
- 22) Ebd., S. 194. u. 198.
- 23) アレマンはさまざまな作家の文学論を一冊のアンソロジーに編纂したことがある(ARS POETICA. Texte von Dichtern des 20. Jahrhunderts zur Poetik. Hrsg. v. Beda Allemann. Darmstadt 1966,²1971)。それはしかし、単に作家自身の作品解釈や、創作理論を理解しようとしたのではない。目的はあくまでも作家の立場から考察された文学の理論、ポエトロジーの解明にある。この問題を扱った彼の論文を参照。Dichter über Dichtung. In : Definitionen. Essays zur Literatur. Frankfurt a. M. 1963, S. 9-34.
- 24) Allemann : Hölderlin und Heidegger, S. 201.
- 25) Ebd., S. 193.
- 26) Beda Allemann : Beim Wiederlesen von Hölderlins Roman „Hyperion“. In : Bild - Sprache. Texte zwischen Dichten und Denken. Festschrift für Prof. Dr. Ludo Verbeeck. Hrsg. v. Luc Lambrechts/Johan Nowé. Leuven 1990, S. 27.
- 27) Allemann : Über das Dichterische, S. 43.
- 28) Allemann : Beim Wiederlesen von Hölderlins „Hyperion“, S. 15.
- 29) Franz Kafka : Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß. Frankfurt a. M. 1953, S. 360.
- 30) Allemann : Denken, Dichten : Literaturtheoretisch, S. 397.
- 31) Ebd., S. 399.

- 32) Beda Allemann: Experiment und Erfahrung in der Gegenwartsliteratur. In: Experiment und Erfahrung in Wissenschaft und Kunst. Hrsg. v. Walter Strolz. Freiburg i. B./München 1963, S. 281.
- 33) Ebd.
- 34) Ebd., S. 282ff.
- 35) Allemann: Denken, Dichten: Literaturtheoretisch, S. 399.
- 36) Gottfried Benn: Gesammelte Werke in vier Bänden, II, 232. Hier zitiert: ebd., S. 380.
- 37) Paul Celan: Gesammelte Werke in fünf Bänden (1986), III, S. 186.
- 38) Beda Allemann: Paul Celans Sprachgebrauch. In: Argumentum e Silentio. Hrsg. v. Amy D. Colin. Berlin/New York 1987, S. 10.
- 39) Allemann: Denken, Dichten, S. 379. u. 400.
- 40) 参考までにこれらの作家を論じたアレマンの主な著作を以下に紹介しておく。
- Johann Wolfgang von Goethe:
- Zur Funktion der chemischen Gleichnisrede in Goethes „Wahlverwandtschaften“.
In: Untersuchungen zur Literatur als Geschichte. Festschrift für Benno von Wiese. Hrsg. v. Vincent J. Günther/Hemut Koopmann/Peter Pütz/Hans-Joachim Schrimpf. Berlin 1973, S. 199-218; Goethes „Wahlverwandtschaften“ als Transzendentalroman. In: Studien zur Goethezeit. Erich Trunz zum 75. Geburtstag. Hrsg. v. Hans-Joachim Mähl/Eberhard Mannack. Heidelberg 1981, S. 9-32.
- Friedrich Schlegel/Novalis/Thomas Mann/(Nietzsche/Musil) :
Ironie und Dichtung. Pfullingen 1955.
- Friedrich Hölderlin:
Hölderlins „Friedensfeier“. Pfullingen 1955; Hölderlin zwischen Antike und Moderne. In: Hölderlin-Jahrbuch 24 (1984/85), S. 29-62.
- Heinrich von Kleist:
Heinrich von Kleist. Ein dramaturgisches Modell. In: Bonner Beiträge, Heinrich von Kleist zum 200. Geburtstag. Bonn 1977, S. 7-30; Sinn und Unsinn von Kleists Gespräch „Über das Marionettentheater“. In: Kleist-Jahrbuch 1981/82. Berlin 1983, S. 50-65; Brecht und Kleist. In: Drama und Theater im 20. Jahrhundert. Festschrift für Walter Hinck. Hrsg. v. Hans-Dietrich Irmscher/Werner Keller. Göttingen 1983, S. 204-212; Kleist und Kafka. Ein Strukturvergleich. In: Franz Kafka. Themen und Probleme. Hrsg. v. Claude David. Göttingen 1980, S. 152-172.

Gottfried Keller :

Gottfried Keller und das Skurrile. In : Jahresbericht der Gottfried Keller-Gesellschaft 1959. Zürich 1960, S. 1-16.

Friedrich Nietzsche :

Nietzsche und die Dichtung. In : Nietzsche. Werk und Wirkung. Hrsg. v. Hans Steffen. Göttingen 1974, S. 436-451.

Hugo von Hofmannsthal :

Die Schwierigkeiten zu enden. In : Die Kunst zu enden. Hrsg. v. Jürgen Söring. Frankfurt a. M. /Bern/ New York/Paris 1990, S. 134-139.

Rainer Maria Rilke :

Zeit und Figur beim späten Rilke. Pfullingen 1961 ; Rilke und Mallarmé. Entwicklung einer Grundfrage der symbolischen Poetik. In : Wort und Gestalt. Hrsg. v. Karl Rüdiger. München 1962, S. 81-100 ; Rilke und der Mythos. In : Rilke heute II. Frankfurt a. M. 1976 ; Rilke als Europäer. In : Creative Encounter. Festschrift für Herman Salinger Hrsg. v. Leland R. Phelps. Chapel Hill 1978, S. 45-56.

Robert Musil :

Robert Musil und die Zeitgeschichte. In : Literatur und Germanistik nach der Machtübernahme. Hrsg. v. Beda Allemann. Bonn 1983, S. 90-117.

Franz Kafka :

Kafka, „Der Prozeß“. In : Der deutsche Roman vom Barock bis zur Gegenwart. Struktur und Geschichte. Hrsg. v. Benno von Wiese. Düsseldorf 1963, Bd. II, S. 234-290 ; Kafka, „Von den Gleichnissen“. In : Zeitschrift für deutsche Philologie 83 (1964), Sonderheft 3, S. 97-106 ; Kafkas „Kleine Fabel“. In : Teilnahme und Spiegelung. Festschrift für Horst Rüdiger. Hrsg. v. Beda Allemann/Erwin Koppen. Berlin/New York 1975, S. 465-484 ; Kafka und Mythologie. In : Zeitschrift für Ästhetik und allgemeine Kunstwissenschaft 20 (1975), S. 129-144 ; „Scheinbare Leere“. Zur thematischen Struktur von Kafkas Schloß-Roman. In : Melanges offerts à Claude David pour son 70e anniversaire. Hrsg. v. Jean-Louis Bandet. Bern/Frankfurt a. M. /New York 1983, S. 1-36 ; Fragen an die judaistische Kafka-Deutung am Beispiel Benjamins. In : Franz Kafka und das Judentum. Hrsg. v. Karl Erich Grözinger u. a. Frankfurt a. M. 1987, S. 35-70.

Gottfried Benn :

Gottfried Benn. Das Problem der Geschichte. Pfullingen 1963 ; Statische Gedichte.

Zu einem Gedicht von Gottfried Benn. In : Merkur 10 (1956), S. 402-413.

Nelly Sachs :

Hinweis auf einen Gedicht-Raum. In : Nelly Sachs zu ehren. Frankfurt a. M. 1961, S. 317-324 (Das Buch der Nelly Sachs, hrsg. v. Bengt Holmquist, Frankfurt a. M. 1968, S. 291-308).

Bertolt Brecht :

Brecht und Kleist. Siehe Kleist.

Elias Canetti :

Elias Canetti—Ein Ohrenzeuge. In : Hüter der Verwandlung. München 1985, S. 237-244.

Max Frisch :

Die Struktur der Komödie bei Frisch und Dürrenmatt. In : Das deutsche Lustspiel II. Hrsg. v. Hans Steffen. Göttingen 1969, S. 200-217.

Friedrich Dürrenmatt :

Friedrich Dürrenmatt, „Es steht geschrieben“. In : Das deutsche Drama vom Barock bis zur Gegenwart. Hrsg. v. Benno von Wiese. Düsseldorf 1958 Bd. II, S. 415-432.

Paul Celan :

Paul Celan, „Die Niemandrose“. In : Neue Rundschau 75 (1964), S. 146-151 ; Zu Paul Celans neuem Gedichtband „Atemwende“. In : Dichten und Trachten 29 (1967), S. 6-11 ; Das Gedicht und seine Wirklichkeit. In : Études Germaniques 25 (1970), S. 2-15.

- 41) Beda Allemann : Kafka, die Geschichte, Ost und West. In Vorbereitung zum Druck. Vgl. Kafka : Sämtliche Erzählungen. Hrsg. v. Paul Raabe. Frankfurt a. M. 1970, S. 138f.

(長崎大学教授)